

小田原史談

第107号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

新春ごあいさつ

会長 中野敬次郎

私たちの小田原史談会が発足したのは、昭和三十年の春ですから、会の創立以来今年はずでに二十八年目になります。

願いますと、この歳月の間にはいろいろの事があり何回も困難な苦しいことに直面いたしました。幸に会員諸兄姉のご協力、ご援助により会運を保ち、今日まで種々の行事や事業を行ってまいりまして、少なからぬ文化業績をあげ得たし、会報の発行も百六回に達し、特に昨年は会報編集の「小田原史談」第二巻の大冊を刊行して好評を博し、小田原地方の郷土資料として意義のあるものを残すことができたのは望外のよろこびでした。

四回にわたる史的、文学的記念講演会も極めて有

地の二市の姉妹都市提結が成立し、私たち史談会もその文化交流団に参加して今市訪問を行いました。

意義なものであったし、五回に及ぶ、日帰りの市内、県内、宿泊の県外の史跡めぐり、いづれも成功で楽しい一年間でした。今年是非ともこれ以上の年にしたいと思えます。

また昨年は小田原市では待望の文化会館が、中央公民館の名で完成し、また小田原、今市両市が郷土の誇りとする偉人二宮尊徳を結び、綱として誕生地と終焉

小田原地方の文化活動の一端を担う私たちの史談会も、今年には新春とともに心気一新して発展につとめなければならぬと存じますので、会員各位の一層のご自愛とご活動をお祈りする次第であります。

後北条氏秘話

(13)

北条氏直没後の一門家臣の行方

中野敬次郎 執筆

(-)氏直の急逝と一門の衝撃
小田原城が落城して、当主北条氏直が高野山に追放

と伊豆菟山城主北条美濃守氏規、もと下野佐野城主左エ門佐氏忠、もと武州小机城主の石土門佐氏光、それに一族のもとに相州小机城主であった北条左エ門大夫氏勝など、家臣では松田左馬助秀治、大道寺孫九郎直政、山角治郎大輔直繁を初め山上強右エ門、諏訪部源次郎、岡野三右エ門、内藤左近、富永喜左エ門、菊池七兵衛、余田大膳亮など以下三十余人、兵卒は三百余人に及んでいたのは、いささか世上を驚かせた。「雨庵大閤記」にも作者小瀬甫庵は

「供奉の者ども五十人の内外たるべきと皆人思い侍りにしに、かくのごときは、秀吉公大なる御心中察し思ふべし」と記している。秀吉のこの寛大なる処置は北条家は関八州に百年間も覇業を果たしてきた名家であるからその絶滅を惜しみ、将来大名に取り立てて家系を存続させてやろうという心組みで、その時の用意にもと、このような大勢の家臣団を持って行くことを許したのである。が、一面北条氏側から考えると、すでに敗残の旧主家である氏直を護つて、このように多数の一門族、家臣が高野の山中まで

随従していった心情は誠に

うるわしいもので、さすがに善政百年の北条氏だからと思われ。

高野山追放後二年間のこれらの家臣の人々が、生活の貧困と山中の寒気、その他の不便とたたかいたが、主家を守っていった涙ぐましい行動は、現存の高野山「高室院文書」の所々に歴々とあらわれている。一縷の望みを托した主家再興もその再興直前に氏直の急逝にあったことは、一族家臣団に青天霹靂の大衝撃であった。彼等は港しきと落胆の淵に陥つたのである。

北条氏末期の賢臣として知られた板部岡江雪は、随従家臣団に加わらず、この頃、旧主氏直夫人督姫の守り役をつとめつつ、秀吉の御伽衆をなしていたが、彼は陰に陽に主家再興に盡力したのであるから、さすがに、氏直急死の報に打撃をうけ、御伽の席で口をきかず沈んでいったと伝えられている。

わたした子供がなかったのである。

しかし実は氏直には子供がある。一人は女子で、まだ他に一人の男子もあったという。

女子は夫人督姫が小田原域で生んだ子で、落城のとき、あまりにも幼少であったので、母の督姫に引きとられて行ったのである。天正十八年(元)籠城中に生まれているので、父氏直の没した時は三歳の女子であったから、これに北条氏の跡目を継がせる訳にはいかなかった。因に述べると、督姫は氏直没後、文禄二年(元)九月に池田三左エ門輝政の後室として再嫁したので、この娘、茶阿姫をつれていったが、徳川家康の孫娘に当ることもあるので、池田家でも大切に養育されて、輝政の子池田新三郎の夫人としたが、何故か十三歳で没してしまっている。墓が京都大徳寺塔中の高室院の「北条氏過去帳」の中に

宗珠院殿
華香宗春大禅定尼
慶長七年三月廿八日
新三郎御前也
とあるのが、この女子である。男の子については、仙台に住した北条善左エ門氏次、入道安清という人が

氏直の子であるといふ、現在まで子孫があつて仙台の北条家として知られている仙台城下金勝寺にあつた墓碑が、今は湯本早雲寺に移されてあるので相当信用ができると思うが確実性はない。母は勿論、氏直正室督姫であり、強いて言えば北条系図の一本に見える氏直の子で、母は松本豊後入道法雲の妹の阿栗であつたとするものがこれに当たるのであろう。

いずれにしても以上のよきな訳で氏直の名跡を継ぐべき子がないので、氏直の叔父に当たる美濃守氏規に跡を継がせようということになつた。氏規は氏政、氏照の直ぐの弟で、天正年中に北条氏を代表して上洛して秀吉に謁見し、北条家入観の政治折衝に当たつたこともあつて旧知であり、小田原戦役のとき、葦山城を守つて最後まで降伏しなかつた勇将として秀吉に信頼を置かれていたので、北条氏の後継としては数ある北条一門一族のうち最も適格とされたためであらう。秀吉は、氏規に河内国(大阪府)狭山一万余を与えて大名に取り立てることにした。これが維新まで続いた河内狭山北条家である。そこで、氏規は大阪において氏直の家来で氏直家臣団の

総括をしていた大道寺孫九郎や松田左馬助らに會つて事情をのべて相談をしたところ、大道寺らも大いに喜んで、氏規を旧主氏直と思ひ、挙げて奉仕することを約束したのである。ところがここに問題がある。

氏規が大名になることが決定して、その由が氏規の旧領葦山に伝わると、伊豆の旧臣たちが干天に雨を得たように喜び、ぞくぞく氏規のもとに集まつて来たのである。

当時の大名というのは、一万石では、百五十人か二百人の家臣を養うのがせいぜいである。これでは北条氏直方の旧臣たちは、氏規の家臣として這入る余地がないことになるので、孫九郎を初めとする三百余人の氏直の旧家臣団はやむなく氏規のもとを去ることになつた。主家のなくなつたこの三百余人は二年間の主家再興の苦心も徒勞となつて涙を吞んで四方に散ることになり、旧北条家臣団はここに解散となつたのである。哀れも一入という次第であつた。

所望によつてその御伽衆となつた。秀吉没後はまた家康からも招かれて御伽衆となり、生涯榮誉安楽にくらしたが、その他の氏直随従家臣たちは、泣く泣く四方に僅かのつてを求めて四散して行つた。

大道寺孫九郎の場合はまだ都合がよく、丁度、氏直逝去のとき、その夫人督姫が洛中に滞在していたので、旧知を求めて、これに頼り一時督姫に仕えて千五百石を給せられて旗本の列に加えられたので、維新の頃まで浮沈がなかつた。しかし、多くの者たちはそうはいかなかつた。苦勞した一家の例を少し記して見よう。

氏直随従家臣団の中に菊地七兵衛のあることは前記した。菊地家(作家故菊地寛氏祖先)は北条氏康の永禄年間(作られた)「小田原衆所領役帳」の中に、菊地掃部丞、菊地郷左エ門、菊地右エ門、菊地右近丞などの一族の名と知行地の見える北条家の旧臣であつた。

菊地七兵衛武茂は、父七兵衛武宗が氏康に仕えて戦功があつてから、当主近侍となつて氏直に目をかけられていたので、高野山下向のときの御供の一人に加わつたのであるが、すでに高野山で落髪して安枕と号した

が、氏直の急逝に遭つて途方に暮れ、山を下つて京都に入つて閑居していた。後に土方河内守雄久がその秀才と生活苦をあわれんで二百石を与えて、伊勢孤野領に住居させたので、遂にこの地で世を去つたのである。その子の武方は父の死とともに伊勢在住の都合が悪しくなつたのか、去つて大阪に出て儒学を学び、元春と名乗つた。この時、江州膳所藩主本多繇之助康俊に儒臣として召抱えられて、この地で死んだ、孫の八右エ門武倍になつて、故あつて去つて、遂に鹿尾島に流されていった。そして島津家の儒臣となつたのである。

しかし、島津家は本身ゆえずで召抱えの儒臣が多くその後塵を拜するに過ぎず不遇をかこつた。そして島津家を去つて、四国に移り、讃岐山田郡木太村に至り、崇山斎の儒号も一向にあらわれないことなく、この僻村に生涯を終えたのである。五代して八右エ門武賢のとき、漸く頭われて高松藩の儒臣として召抱えられ黄山の号をもつて知られるに至つた。これより高松藩儒として維新に至つたので小田原北条氏の臣七兵衛武茂(安枕より、流転々々して十一伝し、故作家菊地寛氏となつたのである)

被龍登候致供候。万事御指南奉願候。將又兩種被懸御意候、忝存候。猶於其他可得御意候。恐々謹言。

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

北条氏再興のため苦忠を払つた板岡江雪のような人物は、彼自体非常な才人で世に聞こえたる者ゆえ、小田原落城と同時に秀吉の

旅の途中で書いたものだがこの書状から推察する限り病氣中とも思えないのに、それより丁度一ヶ月余りで死去している。

恐らく急病と思うが、或は他に死因があったのだからか。自殺でないかとも考えられる。とにかく、死因には疑問が残る。

さて、氏光の兄氏忠の場合はどうしたのか。上方を去って伊豆に降っている。氏直が高野に入ってから大阪で卒去するまでの二年間

には、氏忠の書いた文書も見当らず、一切の消息もない点からすると、伊豆下向は氏直生存中であつたのではないかととも思われるが明らかでないから今は氏直卒去によって北条家再興の望みも絶え、弟は早く世を去り、兄氏親のみ大名取り立てになつたが、彼一人孤独となり、落魄の身を伊豆に流転したものとするのが妥当であろう。

北条氏忠が伊豆に下つたのは、伊豆の河津城主の蔭山長門守氏広を頼つたのである。

蔭山氏というのは清和源氏足利氏の一族で、この頃代々伊豆の一豪族として河津城(伊豆河津町笹原)に拠つており、小田原北条氏に仕えていた。この蔭山氏広に北条氏忠

の娘と孫娘とが養われていたのである。この関係はすでに「徳川家康の愛妾お万の方小田原城中に生まる」の項で記述したのであるが念のため概略を再述すると

先づ北条氏忠であるが、北条三代の太守氏康の五男で幼名新三郎、長じて左エ門佐氏忠また氏能と名乗つた

北条氏が下野国を征服したとき、佐野城主佐野修理亮宗綱の養子となつて佐野家を継いだ。号を大関齊と称した。

小田原戦役のときは佐野城には僅かの旧臣の一部を籠め置き、自らは配下大半の兵を率いて小田原城に籠城したのである。

当時、三浦氏の一族で、房総里見氏の配下として上総勝浦城を守っている正木氏という名家があつた。北条、里見両氏の連年の交戦のため、北条氏の圧力にもたえかねた正木氏は、里見氏に叛いて小田原北条氏に属することになつたので、

時の正木氏の当主時忠の五男正木左近大夫頼忠は、北条氏への人質として小田原に送られて、永く北条氏の城下に任んでいたのである

そして北条氏忠(氏能、氏隆)の娘(性殊院)と結婚して小田原で三人の男子と一人の女子を儲けたが、この女子が後の徳川家康の愛

妾となり紀伊大納言頼宣と水戸中納言頼房とを生んだ有名なお万の方となる女性である。

しかし、永く小田原に人質であつた正木頼忠が、勝浦城主となつて、正木家の家督を継ぐようになったので、次男為春を自分に代わつて人質として小田原に留め(他の男子は早逝)、頼忠は勝浦に帰つてしまった

その時、頼忠は夫人性殊院と娘お万とを、夫人の父北条氏忠に預けて行つたのである。

正木頼忠は勝浦に帰ると間もなく、また里見氏に所属するようになったので、北条家出身の女性を夫人として迎へて都合が悪かつたのか離婚し、里見氏から後室を迎える形となつたのである。

折柄、伊豆河津城主蔭山長門守氏広が先妻を亡くして不便をしていたときであるので、氏広が後室として性殊院を迎へることになつたのである。そこで性殊院は一子お万をつれて蔭山夫人として伊豆河津城に移つた。

この時、小田原戦役が起きて北条氏滅亡の非運が来たのである。

このような次第で、北条氏忠は、娘が蔭山氏広夫人となり、孫娘が氏広養女となつて

なつていたので、この蔭山氏を頼つて伊豆河津郷に降つたのである。

現在、河津町の臨済宗林際寺に氏忠の位牌と墓とがある。「豆州志稿」によると、同寺に北条大岡斎の寺記を掲げて

「北条氏康第五子氏能(氏忠のこと)武州川越城を守る。後故あつて河津城主蔭山七郎左エ門に依り、大関齊と号し、終に此に卒す大関齊一女一男を挙げ、於万、吉千代と名づく」とあることを記している

が、於万(お万)吉千代を大関齊の子とあるのは誤まりで、実は正木頼忠(親齊)の子で大関齊氏忠の孫である。

氏忠が最後まで河津の地に閑居して終つたことは明らかであるが、その没年や年令などについては一切わからない。

ところが静岡富土市内の蓼原というところに日蓮宗の源立寺があり、それより東方三百餘ぐらゐのところに、同じ日蓮宗の蓮心寺という寺がある。この両寺にある位牌に北条氏忠のものではないかと思われるものがある。

源立寺のものは、表 当寺本尊者北条氏直守 本尊也 領上

相州小棹城主 佐野新左衛門尉 天正年中納之 裏 用勝院殿宗讀日妙 神儀

とあるし、蓮心寺のものも表 当地元祖 用勝院殿宗讀日妙神儀 裏 遠沾院殿妙讀日經神女

相州小棹城主 佐野新左エ門景政 元和六庚申年 十二月十四日 内室 江川大郎左衛門娘 とある。富土郡のこの地方には佐野姓の家が非常に多い。土地の伝説では、天正十八年の小田原戦役の時

下野佐野城の城主であつた佐野(北条)氏忠が、佐野地方の人々を大量に引具して小田原に至つて籠城したところが小田原が落ちて北条氏は滅んだし、佐野も落城してしまつて、小田原に籠城した佐野武士たちは故郷に帰ることが出来なくなつてしまつた。そして岳南の富土郡地方に移つた彼等は、原野を開墾して定住し

それらの人々が氏寺としているのが、この両寺であると伝えている。

そう言えば、両寺に伝わるこの位牌は北条氏忠こと佐野新左エ門尉のものでないかと思われるふしがある

位牌は最初のものではなく後に作り代えたものらしく

て、誤字がある。相州小棹城とするのは恐らく武州小机城の誤記かと思われる。北条氏忠は佐野家の家督を継ぎ、通称を新三郎とい

い、左衛門佐を役名として名乗つた故、佐野新左エ門とも言ったであらう。ただ佐野景政の名が疑問でよくわからないが、氏忠の別名か、また他の人物を指すのか、或いは誤記であるのだろうか。死亡の元和六年(一六二〇)という年まで氏忠が生存していたとしても長命ではあるが、さほど矛盾を感じない。用勝院殿が氏忠の法名で、遠沾院が夫人の諡号らしいが、もし用勝院を氏忠とすれば、彼は伊豆下向の後に再婚したことになる。然もその後室が伊豆葦山豪族の江川太郎左エ門の娘であると記されているのは、私の思考を拡げる資料となる。

と言うのは、大関齊氏忠の孫娘お万の方が、徳川家康の愛妾となるのが江川太郎左エ門の仲立ちによるものであるからである。氏忠とその娘と孫娘の三人が身を寄せた蔭山家は小田原落城のあと、一時修善寺の加殿に逃れて、一族がここに

住んでいたが、後更に加殿を去つて駿河沼津に移つたこの時、蔭山家の沈淪の姿に同情して、旧交の篤かつ

た江川氏が媒介して養女としてお万(氏忠の孫)を徳川家に仕えるよう許らった。これが家康愛妾お万の方の出現となるのだが、この江川氏と蔭山氏との親交を考えると、当時、蔭山家に寄遇中であつたお万の方の実祖父氏忠が、江川氏から後室を迎えたとする事、また現在源立寺の寺紋は、北条氏の三ッ鱗を使用しており、寺内に小田原北條本家に伝わつたという仏像とその厨子が安置されている。実はこれがすばらしい立派なもので、寺伝によると、位牌にも「当寺本尊者北条氏直ノ守木尊也」とあるようにに仏像、厨子ともに北条家に代々伝わつたもので、氏直が特に持念仏として、尊崇していたものと言われ、正観音菩薩の木立像で高さ一尺三寸あり、厨子も三ッ鱗の紋がついていて、ともに優れたものであり、北条家伝来というに間違いないと信ずる。

これがどうして源立寺に入ったかと言え、氏直から賜つたものを佐野新左エ門が天正年間に奉納したのであると伝えているが類推すれば、北条氏直が持念仏として高野山まで持つていったものを、氏直没後、氏忠が持つて富士山麓に来つて源立寺に奉納したものではないだろうか。そう言えば、源立寺の境内に北条氏政の首塚という宝篋印塔形の墓があるが、これは北条氏政の割腹後その首級を佐野新左エ門が持参して埋葬したものと云われているが、墓石には刻字もなく、墓石の下を掘つても何も出なかつたとのことである。

これも氏政の首級がこんな所に埋葬されていることは、おかしきことであるから、或は氏忠こと佐野新左エ門の墓なのではなからうか。左様に考えてみると、北条氏忠は伊豆河津郷で歿して林原寺に葬られたのか、富士市藤原の地で歿して源立寺に埋められたのであるか、推測をたくましくすれば、どこまでも拡がっていくが、氏忠という人物のアウトラインはほぼつかめたようだ。氏忠の生涯は、今後の研究で面白くなりそうである。(香川政治載録)

自修学校物語

西山 銈太郎

十、五年制中学校

への昇格

昭和十二年七月七日支那事変が勃発した。事変は拡大の一途を辿つた。多くの在郷軍人が召集を受け、軍需産業は忙しくなつた。工場は勿論、総ての事業所は急激に労働力の補充と増強の必要に迫られた。永い間の就職難に喘いで来た人々は、先を争つて職を求めた。自修学校生徒の親達も、戦争は何時迄続くのか何時終るのかも知れないからと、子弟の学業を途中で放棄させて、慌て、鉄道に、会社に工場にと就職させた。

在任中で四月四日と九日には、課業済後田代信二教頭からその計画を話された。翌十六年二月十九日、東京赤坂の近歩三に応召中の私は大井竜跳先生から印刷した挨拶状を頂いたが、大井先生の当時の決意の程をよく知る事が出来る。「肅啓春寒料峭の候益々御清祥為那家欣賞至極に奉存候。扱て兼てより多大の御援助を蒙り居り候自修学校も昨年にて三十年を経過致し教育報国の素志も一貫致し候もの、御承知の通り大東亜の共栄体制の完備後其の興隆を図り世界の道義的指導者たらんとする後継者の教育は刻下の一大急務に有之従て本校も時代の推移に即応致す可く旧組織を改める皇紀二千六百年を一転換期と致し四月より財団法人自修学園を設立湖北中学校を設置致すべく認可申請の所去る二月十二日文部大臣の認可有之候に付今以後自修創立の精神を体し中等教育充実の一翼を担ひ育英報国の実を具現致度候間皇國の為将来共指指導御後援を賜り度伏して奉懇願候也失礼とは存じつゝ、日時切迫致し居り候間寸楮を以て御挨拶芳々御願申上度

如斯御座候

昭和十六年二月 文部大臣認可

湖北中学校

大井竜跳

そして三月二十六日「第一学年の入学検査は十八日より二十日迄の三日間に亘り実施、志願者数二二三、入学許可数一二一、二十四日発表、前川小学校より志願者尋六、二、高二、一で全部入学。」の旨書いた二十五日附の葉書を頂いた(前羽小学校の事は特別に関係ないが、当時私の岳父が校長だったので温い配慮で書き加えて下さつたのである)。

昭和二十三年四月学制改革に依り、新制中学校を併設せる湖北高等学校となり更に四十年十月向上高等学校と改名、向上高等学校は翌昭和四十一年十一月伊勢原市に移転隆々と発展しつつある。

述べた通りである。大井校長先生は私共の場合修身科と、一年の時は代数を、二年生になつてからは英語の副読本としてイソップ物語を講義された。修身は生徒心得から入つた事は前にも書いた通りである。其の話術には何者をも引きつけねばやまない熱のある講義には、なま意気盛りの生徒もいつしか話題の中に引き込まれ、固唾をのんで時のたつのを忘れた。修身道徳という只固い許りの話ではなかつた。時には笑はされた。一同腹の皮がよじれる程に笑つた。クラス中が収拾がつかなくなるとかと思ふ様な事は屢々だつたが、何時しか又元の敵肅に返つた。話の中の諺や格言等を英語でも云はれた私共は修身の時間に覚えた英語の数は多い。生徒の不心得があつても小言を云はれた事は殆んどなかつた。時に叱る事はあつても、決して顔の色を変えられた事はなかつた。あの真白なほゝひげ・あごひげ・口ひげの間から見える唇には、微笑の絶える事はなかつた。用事があつて汽車で出かける時には、私の部落中の県道を通つて下曾我駅へ行かれた。私の祖父はそんな大井先生によく出

合って「おっさんにはどうも恐縮してしまふよ。遠くの方から帽子を取ってにこ／＼して来られるから」とよく云った。

大井先生は生徒の事を、公式の場合以外は生徒とは云われなかった。「うちの子供」と云われた。上の台地へ移転してからは、校長室からの視界は広く方々よく見えた。下校後の生徒が帰りの列車を待ちつゝ、よく「めがね」の方から鉄道線路を駅の方へブラ／＼と歩いて行く数名が見えた。

白いゲートルをつけてるのですぐ判る。こんな時には「あそこへ行くのはうちの子供だがあぶないじゃないか。汽車の来ない中早く通ってしまへばいいの」とよく云われた。

当時の修身の教科書とノートが見つかった。文学博士井上哲次郎著、金港堂書籍株式会社発行で、その巻一に「不断の努力」なる一課があった。これは吉田松陰を鑑としたものである。ノートに依って回顧してみる。松陰の年譜の抜萃が書いてある。次に松下村塾の説明がある。

次に本題に入って、吉田松陰、修学、読書と交友、質素なる生活、忠孝の徳について講義され、和・洋・漢の多くの資料・参考書に

依り、松陰の人物、その修学修徳について述べられてある。多分此の科で数時間を費された様な気がする。自修学校は塾から始まった。私は五十余年前の此のノートを見て、フト自修学校は現代の松下村塾だったのでなかつたかと思つた。先生も多分その様な気持で生徒に接して居られたのではなかつたか。惜しむらくは、先生に少なくとも、もう十年だけ生きて居て欲しかった。

十二、自修学校の功績 昭和二十二年二月末、私は満五ヶ年の外地(応召後一年九ヶ月は東京だった)から帰還して、湘北中学校となつた母校を尋ねた。数年振りで大井先生にお目にかゝり、帰還の御挨拶を申し上げた。大井先生は壮年の頃重い病気をされて以来髪もひげも全部白くなつてしまわれたのだが、この五年間に、その白い髪も、白ひげも、微笑の唇もすっかりやつれて居られた。

湘北中学校第一回生の星野孝一君の話では、戦争も漸く苛烈になつて来たらは生徒も軍事工場への勤労働員で勉強どころでなく生徒から見れば学校の苦勞の細かい点は解らないが、大井校長先生も、満員の汽車にもまれて、生徒の動員先

を行つての激励や精神訓話等、一通りの苦勞ではなかつた様だ。との事である。これ等の苦勞が重ならしたのであらう大井校長先生は新制高等学校を發足せしめられた直後の昭和二十三年七月三日、青年の教育に一切を捧げたその生涯を終えられた。時に七十二才であつた。

先生の死は多くの人々特に学校関係者と瑞雲寺檀家には大変に惜しまれた。瑞雲寺では過去十九世住職が中興の号を贈られたが、特に「重中興龍衝天大和尚」の法号を贈られたい。

我が国の就学率は、戦争前に於てさえ世界の最高水準を誇つたのであるが、当時中学校への進学率は二〇%と去われた。然もそれは比較的都会に高く地方に低かつた。明治・大正・昭和の三代に亘つて、現在の小田原市・南足柄市・秦野市を含んでの当時の、足柄上・下並びに中の三郡を中心とした近郷近在の青年で、ここに学んだ者は、県外からの十指に余る人々を含んで、約五千名と推定される質実剛健の学风に培はれて夫々の郷土に、或は職場に於て、何れもその中心人物となり、常に發展の原動力であり先駆者となつた。今尚多くの人が第一線で活躍している。

神奈川西部地区に於て自修学校が、教育・文化特に道義の昂揚に寄与した功績が大であり、自修学校の創設者、校長大井龍跳先生の偉大なる足跡は不滅のものである。

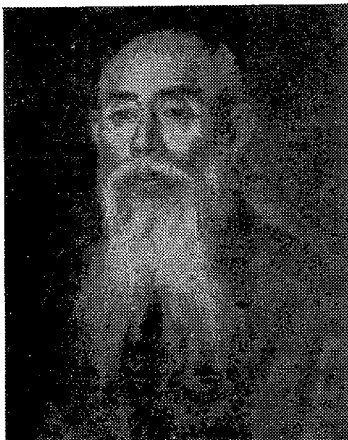
昭和五十五年は自修学校創立七十周年で、随つて明治四十三年生れの第十七回生も七十才である。第一回生は八十六才、自修学会、自修学会時代の人々は九十才以上にもなつてるのであるが、当時の純農村地帯の八十才・九十才と云う高令者が、英語を読み、代数や幾何を解くと云う事等誠に愉快である。自修学校がなかつたならば、中学生の孫の教科書をのぞいて見ようと云う気になる者が、果して何人居たであろうか。

を与え、且つ又伊沢修二氏(第三回生)榎本幸三郎(第一回生)大城讓興秀積光桑原慧網宝田陸雄柿沼信道三浦克巳

支那事变当時、私が在職した頃は一部異動があつて左記各氏が在職した。

現職員 設立者 大井 龍跳 校長 大井 龍跳 教務主任 田代 信二 教諭 太田 耕三 全 杉本 香三 全 権野 忠助 生徒監 小島 幸一 (第十一回生) 校 医 大友 盛幾 旧職員 小酒部鶴太郎 (第二回生)

此の地方の教育・文化特に道義の昂揚に大なる影響



大井龍跳校長先生遺影

支那事变当時、私が在職した頃は一部異動があつて左記各氏が在職した。

大井 詠玄 栄 重成 (第十二回中退) 松本 文雄 西山鉦太郎 (第十七回生) 他に 安藤 博康 氏が在職し、私が知り得た方は以上校長以下二十一氏である。(括弧内は筆者注)

此の中自修学校在学者が六名ある。此の中には上級学校に進学された方もあるが、大井校長先生が、その教え子を信頼され、生徒も亦よくその教えを守り、そ負担に應える師弟の相互信頼の表われであらう。

又何れもの先生が、大井校長先生の意を体して、真摯に、真剣に、夫々の任務に従事された。教えること云う事は、自分自身をも厳しく律して率先範を示し、己自身をも向上せしめて本當

の目的が達せられるものである。

十四、建碑銘

昭和二十五年自修学校は創立四十周年を迎えた。時恰も大井校長先生の三回忌でもあった。自修学校以来の有志に依って、先生の遺徳を偲んで、先生の墓地に碑が建てられた。

碑の正面上部横に「建碑銘」その下に縦書きに

湘北高等学校長大井竜跳先生逝いて早くも三回忌を迎え温容高風追慕の情転切々たるを覚ゆる瑞雲寺住職として信を一身に聚むるも宜なるかな弱冠にして学舎を寺隅に興してより自修学校を経て自修学園の今日に到るまで風を望み薫化の恵に浴するもの七千に及ぶ自修創立四十周年を記念し学園卒業生等議りここに先生の墓碑を建立し遺徳を偲ぶ

昭和二十五年十月十四日 自修学園

湘北高等学校校長

田代信二識

と書かれてる。文は簡にして要を得た名文である。先生の逝去をいたみ、先生を慕う様をよく伝えて居る。裏面には

昭和二十五年十月十四日

自修学校卒業生

自修学園卒業生 建之

教職員生徒

十五、自修学校と私

私は明治四十三年七月自修学校と共に生れ、大正十四年三月高等小学校を卒業して自修学校に入学しその五月には始めて洋服と定められた。大正十五年八月東方台上に移転した時は二年生で、瑞雲寺本堂前から庫裡の前、墓地の中を横切って一列に並び、板やトタン板等の軽い材料を手送りて手伝った。後になつて鉛筆か何か学用品を頂いた。

昭和二年三月、台上に移つてからの最初であり、又昭和の最初でもある第十七回生として卒業した。後年三十二回生迄出たから、後半の最初でもあった。又卒業記念には校旗を作った。

昭和十二年七月支那事變が勃発すると八月末郷土部隊である第一〇一師団に動員下令、大井諦玄先生に召集令状が来た。大井諦玄先生は、普通学科の他に、一日三時間宛十五時間の教練科を担当して居られた。第六回卒業生の高橋周治氏を通じて、大井校長先生から「学校へ来て欲しい」との要望を伝えられたが、私は色々考えた末に御辞退した

当時私の家では、機械のない時代で二町歩余の田畑を耕作して居た。村の青年学校教練科の主任指導員であり、在郷軍人会の役員でもあって、時々三、四日間位の未入営補充兵教育があつて引っぱり出された。此の上私が家を明けては、父はさぞ苦しいだろうと思つた。日頃から「いくら忙しくても村の為に働いて置くものだ。」と云つた父は、「お前はいいやならいやで済むだろうが、俺はおっさんに義理があつて困つてしまふ。」としんみり云つた。そこで私は「では教練だけで、三時間宛五日間間にして貰えるならいいけど。」と半ば独り言の様に云つた。私の意向は父から学校に伝えられ、直ちに校長先生自ら正式に見えられた

そして九月早々から、又思い出の坂を登って、思いでの学校へと通う様になつた。爾来二年十ヶ月、私は二つの学校の教練科の責任を負う様になつた。各学年毎、各クラス毎の教育計画や日々の計画及その結果の整理等は一切夜間に行つた二町余りの田畑はそのまま耕作を続けた。

学校で連続五時間の教練は案ではなかつた。生徒が緊張を欠いたかと思ふ様な時には、一寸気合を入れ様と千米、二千米位の駈歩を

する時にはいつもその先頭をかけた。一日の教練が終る頃には、私は腰も、のども痛かつた。

昭和十五年五月、始めて私に臨時召集令状が来た。私は実のところホツとした斯くして私は第二十八、二十九、三十回の卒業生を送り出し、最後の卒業生となる第三十一、三十二回生を受け入れて、大井校長先生始め全職員生徒諸君の寄せ書きの日の丸を贈られ、又歓呼の聲に送られて東京近衛歩兵第三聯隊に応召した。勤闘守衛勤務に服しつ、新しい兵隊を教育しては戦地へ送った。

此の間校長先生始め多くの生徒諸君から激励・慰問

の手紙を頂き、面会にも来て貰つた。教育した兵隊だけを戦地へ送るのは、私には悲しい仕事だった。自らは兵隊達の行く在外部隊への転属を志願して、何回かの後に希望は達せられた外地へ行ってからも多くの方々からお手紙を頂いた

私印から校長先生に近況報告を出した処「……薪の汽車では一同大笑した……」等の御返事を頂いた事も、今日尚記憶に新しい。

私が母校に勤務したのは三年足らずだったが、十年前の生徒時代の忘れ様とした事迄思い起させて呉れた為めに、今も尚数々の思い出が、私の脳裡に鮮明に残つて居る。

四箱根駒形権現について
新編相模風土記には、箱根三社権現社上、祭神三座瓊々杵尊、彦火見尊、木花開耶姫尊なり、各木坐像にて万巻上人の作と云、秘して別当と雖も拝する事なし、天平宝字元年、万巻上人靈夢の告ありて勧請する所なり。

師長の古里へのいざない

内田 盛雄

縁起日、万巻上人天平宝字丁酉、投錫子禄山、練行修史、一夕有靈夢、三輩各告云、我等斯山旧主、権実応化之垂跡也汝留令修練云々、とあり（これ以前聖占仙人がこの山駒岳二千四百年前より修験者の一大霊場となしたと云われる。）
「地名辞書」の高麗神社

について見ると、「ここ蓋し奈良朝に東国に安置せられし韓人の廟寺にして、伊豆山、箱根山の神と同類の廟たり」と記されている。

また「韓来文化と其の事蹟」の箱根山の開発と高麗文化の条に次の様に記されている。

芦の湖畔にある箱根神社は奈良朝以前には駒岳の山頂にあったもので、これを駒形権現と言つた。この駒形権現は、大磯の高麗権現を勧請したものであつて、箱根山の歴史が高麗権現から出発しているのは、言うまでもなく箱根は高麗人によつて最初の開発の跡が下されたものであることを示している。

奈良時代になつて、万巻上人と云う奈良の高僧が箱根山に来て、天平宝字元年に悪夢によつて、駒形権現の山頂から麓に下して箱根三権現社と名付けて湖畔に祀つたのが今の箱根神社である云々。大磯の高麗神社は、高麗人の総領高句麗族の和光を祀つて居るものであると云う。

社伝に拠るに本社祭神は神皇産靈尊にて応神天皇神功皇后此二体は安閑帝の郷宇合祀ありしと云、を相殿とすと云へ当社には往昔、神武帝勅し勧請し給ひしを、

後武内大臣の奏聞に依りて

又神璽を勧請せられしと云う。凡て神秘として猥りに見ることが禁ずるが故、詳にしがたし、又、「箱根山縁起」には神皇后三韓を征し頃高麗の神を当所に勧請ありと伝之日、神功皇后討三韓、後武内大臣奏云、奉請異朝大神、而令祈願天下、長安寧矣即奉遷百濟明神子州、奉遷新羅明神子江州、奉遷高麗大神和光子当州大磯峯因名高麗寺とある。ここ足柄のあけぼのは一つには箱根駒岳山頂に始まったと云える。

(四)東国文化の影響と足柄平野

前章でのべたごとく、恐らく大和朝廷の誕生をみる以前から東国に於て渡来文化の影響が顕著であり、とかく朝廷のにらみをきかすところとなっており、渡来文化の影響の一つとして数えるものに、昭和五十四年出土の群馬県高崎市観音山古墳(六世紀末〜七世紀初期)と云われる象眼大刀や甗、銅製水瓶の出土は大和の騎馬文化と古代日本の形成との関係を物語るものとして、大和をへだてたこの東国に於て、きわめて注目すべきものと云えよう。このことは若狭湾が渡来人上陸の地点にあつて東北文化がこれ等の文化を早く吸収発展させていったことにあ

らう。そして、この足柄もこれ等東国の文化の影響と集団形勢と政治的勢力による影響を受けるべき必然性にあつたものと云える。

孝徳帝(大化)の時本州足柄坂以東地を分けて初めて八国と定められる(常陸国風土記)「中略、至難波長柄豊前大宮臨軒天皇遣高向臣。中臣幡織田蓮等物領自坂已東之國、于時我姫之道。分為八國……」(神奈川県史資料編(1))任ずる国師も八員なり。

足柄平野に於ても東国同様同族の開拓移住地には曲部も集つて開拓していたとみられるが七世紀には大和朝廷が東国を征服し次第に中央勢力下に入つていきました。

(六)大友(大伴)郷、桑原郷 高田郷 足柄平野に倭名抄足柄上郡伴部郷があり「大日本地名書」には伴部郷、倭名足柄上郡伴部郷、高山寺抄郡本伴郷。伴部文件郡とあるは伴部の誤にて伴の族党の人々の住める里なるべしこれは本来大友と云ひしが淳和帝の御諱を避けて伴と改められし興、而も土俗の習は猶萬に依り今に大友と云うに似たり、とある。かようにして種々、安んずるに、

伴部郷(大伴郷)大友か(神奈川県史資料編(1))は四王寺の食封五拾畑であり、荒陵寺御手印縁起に明記されている。

「類聚国史」弘仁十四年四月改大伴宿禰為伴宿禰諱也。地理志料云、伴郡萬治本、小字本、伴部、旁訓登毛倍説為部、即牟礼之急呼群郡古通用、於義不妨矣四天王寺御手印縁起、食封足柄上郡大伴郷五十煙避諱去大。

荒陵寺御手印縁起 四天王寺、法号荒陵寺、荒陵郷荒陵東建立故以処付字号寺名發願四天王故曰四天王寺。

(中略) 今身建立八箇所寺院仏菩薩像、所製法華、勝鬘終誦義母寺施入封戸田園在其員荒陵寺施入巧封参佰戸、在六国墾田拾貳萬七仟伍佰代在播磨国飭磨郡朝来響藝部等左右両条内

(中略) 食封参佰畑 近江国浅井郡岡本郷伍拾畑 遠江国長下郡幡多郡伍拾畑 信濃国筑摩郡荒田郷伍拾畑 相模国足柄上郡大伴郷 伍拾畑 上総国殖生郡山田郷伍拾畑 常陸国行方郡当府郷伍拾畑 乙卯歳割分楮君巧封内、永劫納納既畢 (中略) 乙卯歳正月八日

(神奈川県史資料編(1)) 高田郷 高田郷は天平中舍人親王の食封の地、伍拾戸、田壹佰陸拾七町参段貳伍拾玖歩不輪祖田肆拾参町壹段壹佰参拾玖歩、見輪祖田壹佰貳拾肆町貳段壹佰貳拾歩、祖壹仟捌佰陸拾参段伍把(中略) 天平七年潤十一月十日(七三六年) 天平年間高田郷の郷名が相模の祖云易帳に見える古郷である。他に岡本郷(沼田、岩原、塚原、和田が比定さる)垂水郷、中村郷、桑原郷、(古へは和戸郷か?) 「新編相模風土記」に曰く、家数五十東西五十七町半、南北七町許、古は郷名唱ふ、治承四年十月、頼朝卿当郷を鶴岡八幡の社領に寄附ありこの点は高田郷と同じである。

「東鑑」一日、治承四年十月十六日為武衛御願、於鶴岡若宮、被始長日勤行、以相模国桑原郷、為御供料所「、古えは郷名を唱えていた桑原であった。鎌倉時代には明確な記録となつていゝる。東大寺司の越前の桑原荘の没落と共に消え去つたものか。「大日本地名辞書」に和名抄足柄下郡高田郷

大字存すれど、其は往昔足柄上郡の域内にて伴部と思惟せらるれば同名別地ならんとある記事もあり、綜合するに、大伴郷(新編相模風土記に西大友村阿弥陀堂桑原村淨蓮寺持、とある)桑原郷、高田郷、往昔は各郷隣接集郷ではなかつたらうか。

(七)東国の開拓との関連 東人の活動と経営に於て顯著なる、越前の国(福井県)坂井郡に桑原荘が存する坂井郡の桑原荘は三旬添に注ぐ竹田川上流にあり天平勝宝七年(七五五年)三月、大伴宿禰磨から東大寺に先進され立券された百町がある。この中にはすでに宿禰磨呂自身が開拓した九町が入つていた。又立券の前年からこの土地は東大寺の支配下にあつて大規模な開墾活動がすで行なわれており新に二三町が開かれ未開地の開発と経営に於て田使の曾根連乙磨呂と生江臣東人が當つていた。又群馬県に於ても地名辞書によれば今日の甘楽郡那波郷に高田村、桑原村があり、上高田、下高田、桑原と云う字名あり、「群馬県史、高麗には多高子使主後に、高田首、漢胸の後に桑原史あり、今北甘楽郡に、高田、桑原の地存せる。上代の遺跡ならずやおぼゆ」とあ

る。又新羅王子天日槍の裔に三宅連と同祖に絲井連あり、上野にも曲部の住たることは、神護景雲三年四月甘楽郡那の人絲井部表胡(のち大伴と改姓)等に大伴部の姓を給いたること知るべしとある。

この足柄も、こうした部曲の住したのもおそらく大同小位で、これ等の影響がおよんでいたに相違ない。小田原市多古、又その横に三宅の小字の広い地域がある。多古と並んでいる。同じ甘楽郡、韓料郷であつて現在多野郡吉井町大字多胡、田子、でたつかい、田で働く田子である。小田原にはその横に三宅がある。又丸田、丸島もある。

三宅吉士氏「コニキン」「コシキ」(百済や高句羅の王)と同語で新羅の官位の中に吉士の官号がある。我國に早く渡来した民族でもとは難波吉士と一族をなしていたが、やがて各地に分住し職名や地名を冠し三宅吉士、飛鳥部吉士、壬生吉士、日下部吉士等を名乗つて三宅は、屯倉の主宰で多古↓田子、たつかいと、隣り合せてあることが解るこの小田原の多古、三宅近くに現在発掘で話題をよんだ市民病院土器集落遺跡がある。

東国への玄関口足柄は孝

徳天皇大世紀に我姫之道八
 国に分けたとあり、足柄は
 街道筋である。箱根を越え
 て「とこよ」の国、常陸国
 に向う関門であった。ここ
 足柄平野には、他は飯田郷
 (堀の内、小台、新屋、中
 曾根、柳新田等)、堀の内に
 若宮の大きい地字が残って
 おり飯田郷の中心地でわな
 かるうか。穂倉の跡と八幡
 社跡であろうか、箱根山麓
 のふもと、久野、舟原、塚
 原にかけて多数の古墳ここ
 に住した先住民の墳墓古
 墳が有存している。そして
 これら各郷が足柄平野を開
 拓し米造りに専念していた
 ものと思われる。

(八)古里へのいざない

ここ足柄平野酒匂川氾濫
 原に於ては、以上のことか
 らして往古より各郷とも米
 作の開拓が続けられて来た
 そして弥生後期には遺跡等
 から推測するにその基盤が
 出来ていて、やがて皇族の
 それぞれ所領となり国造制
 下に入っていた。酒匂川
 の氾濫では度毎に大被害が
 出た。稲穂は一番安全な場
 所に移して守らなければな
 らない。水害を避けること
 から古代人は高台に穂倉
 を築いた。最も適したその
 高台は平地の中にあるこの
 近里では千代であったら
 う、千代の地名の起りには
 千葉(ちよう、千葉郷)と

いろいろ説がある。それぞ
 れ意味があるがこの千代は
 せんだい(千台)ではなか
 ったろうか、この千台がい
 つしか千代(せんだい)と
 書き、又いつしか千代(ち
 よ)と化した。千台は、千
 座。つまり千の穀倉のあつ
 た台地「穂倉の台地」にな
 る。千代古屋敷に於ける昭
 和三十三年五月、暗渠排水
 工事が行なわれた。穂倉の
 木材多数が出土した。穀倉
 による一本造りのハシゴ、
 同倉の扉の敷居、その他、
 田舟三ソウ、田下駄数個、
 木製のクワ(スキ)、田の畦
 畦の椽を木グイで補強した
 畦並等が発見された。まだ
 うずもれており、立木の太
 木の根が林立してうずもれ
 ている。この当りは高地で
 ありながら田ゲタで稲作を
 行ったことがうかがえる、
 穂倉の存在も知られ、暗渠
 排水工事でその一部が露出
 したのもと思われる。多く
 の遺物がうづもれているも
 のと思われる。

この千代台中央には昭和
 三十二年の発掘に於ては復
 合遺跡があつたことも確認
 されている。こうした台地
 周囲の高地に田が在存した
 これは、この台等より湧出
 す清水による。
 私が子供の頃この台地周
 囲は見渡す限りの田であつ
 た。台地より湧出す清水は

最近まで数箇所もあつた。
 現在でも残っている所に、
 富田高蔵氏の屋敷、小泉秋
 太郎氏境、富田要氏、加藤
 平一氏西道路ぞい、及びそ
 の道路をまたいた反対側小
 泉榮氏屋敷添ケヤキの根方
 富田利雄氏、富田徳衛氏派
 石子庵坂口、又杉山貞雄氏
 西南吉添の田んぼの中の湧
 水、等々、千代台地周囲は
 この様に水にめぐまれた地
 形にあつた。しかしこの冷
 水そのものは稲作に不向き
 であり、この水を宇廻して
 温めて使つたのであり、そ
 れと思われる遺蹟も石子庵
 下の田んぼにあつた。いわ
 ゆる高い田である。

この様に一日中陽が当り
 米作りには最適地であつた
 ちがいない。
 私が子供の頃は温まり
 田にしや、大きなどじょう
 がいっぱいいて、畦を歩る
 くと、一せいに、ちよこ
 ちよと逃げたものであつた
 そして、千代には、小字
 古屋敷、南に高屋町があり
 これも穂倉の地名の名残り
 と思われる。又字古屋敷、
 現在千代小学校敷地は、八
 幡神社跡にて、この八幡社
 領、八幡畑はそうとう広く
 今の中学校の所まですべ

八幡畑であつた。最近迄校
 庭には松の太木が繁ってい
 た。
 この前二町南の道路わき
 に塔の腰の地名があり、箱
 根神社古文書に高さ八尺が
 あつたことが記載されてい
 る。
 日本紀旧事本紀延喜式に
 高田波蘇伎神社在葉郡高田
 村に称八幡宮波曾岐大神、
 蓋祀物部氏大綜麻杵とあり
 これになつてこの地にも
 祀られたものと思われ、
 後の飯沢へ観音と共に移つ
 た鎮守八幡と思われる八幡
 か、波曾岐は波比岐であり
 曾は牛の意からで、ウケ(牛
 食)古来農業最高神ウケ
 モチ。トヨウケ。ウガノミ
 タマ。古代人はウケ(牛)
 を殺して神にささげ、大会
 食を行なつたことに始まる
 ところからで、波比岐は羽
 草きー羽振きで、鳥が羽
 根を広げた姿に始まり、羽
 草、即ち、穂倉の屋根の
 ことで、雨から稲穂を守る
 穂倉穀倉の神格化であり、
 物部氏が祀つた穂倉の神で
 あつた。この千代に朝日輝
 き夕日さすこの丘に黄金千
 盃、朱千盃と云う云い伝え
 が今に残っている。又千代
 と高田は米処娘、めやりた
 や、婿欲しやなど土地願
 めよく表現したものであ
 る。

この千代小学校の前は、
 今田ぼになつて居るが近年
 まで、神宮の屋敷があつた
 と土地の古老から聞く、
 千代小学校裏側は元竹藪が
 あり、この中に大きな石、
 礎石と思われる石があつた
 とも伝えられている。
 高田には土井の口、室田
 室町と云う地名があり、土
 井の口は川の水を堰止、ト
 イで、田に水を引入れた所
 であらう。
 室田からは、祭祀用酒器
 (S三・六三)が出土、弥生
 時代朱塗の碗無傷、須恵器
 大ガメ経80センチメートル
 と推定される(郷土館蔵)
 等多数出土している所であ
 り、新年に新しき穂倉を建
 てて、祭祀した所ではなか
 ろうか、又、高田八幡社北
 側の小字北ノ前一带は弥生
 式壺や、破片が出ており、
 畑地表面に無数に小片の散
 乱がいたる所でみられ集落
 住居跡とみられる。
 酒匂川氾濫平野で、ひ
 ときわ小高い半円形のこれ
 等の丘、高田、永塚台地の
 中でも千代台地は、みのり
 の秋の収穫の稲穂を保存す
 る輝ける台地で、その雄美
 な丘は遠方をはるかより眺め
 ることが出来たであらう。
 そして、弥生時代末期よ
 り、古墳時代へと稲作農業
 の中心をなし、西に箱根連
 山と富士の雄姿を眺め大和
 への峠げ道をのぞみ、東に

は東国へ抜ける街道を持ち
 南は、相模の海に面して国
 府津(みなと)に舟が入つ
 て来る。
 小規模ながらも師長国造
 の中心地としてのあらゆる
 条件を兼ね備えていた古里
 であつたと云えよう。 完

▼参考資料

神奈川県史 資料編(1)
 日本古代国家の構造
 直木孝次郎著
 古代の地方豪族
 教育社歴史新書
 荘園の人々
 わが町の歴史長野
 文一総合出版
 古代東国史の研究
 金井塚良一著
 郷土の地名 立木望隆著
 小田原史談 四十七号
 古瓦を追って 前場幸治著
 日本に残る古代朝鮮
 段熙麟著
 箱根神社大系上、下
 箱根神社社務所編
 新編相模風土記稿 雄山閣
 宗我神社縁記 宗我神社

